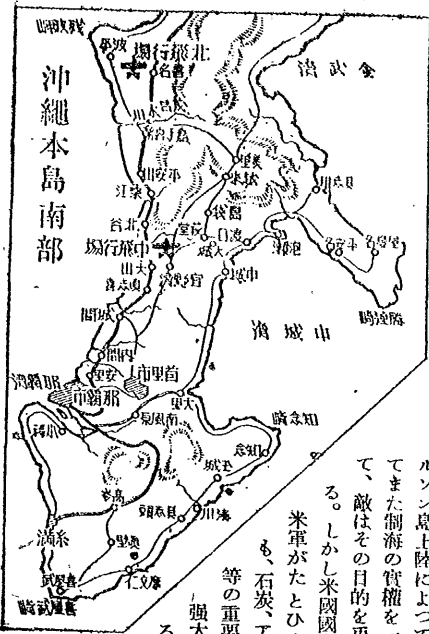


### 對日包圍陣を壓縮し 敵は東京進軍を企圖

敵は今日まで日本攻略の戦法として爆撃戦術と、封鎖戦術の二つを併用して来た。そしてその爆撃戦術より、敵は支那大陸並びにマリナの基地を獲得し、B29の長距離爆撃によつて、日本本土の主として生産地帯、軍事施設等を破壊し、わが戦力を減殺せんとして来たのであるが、大陸基地は地理的條件より種々なる制約を受けるし、また



たとひB29の威力をもつてしても、二千数百軒の距離をへだてたマリナ基地よりの日本本土に對する爆撃は、いささか長鞭馬腹に及ばぬ備もあつた。そこで敵はこのマリナの基地を更に前進せしめんとして、ついに硫黄島への推進に成功したのである。硫黄島と東京間は一千二百軒にして、マリナと東京間の距離二千四百軒を恰度二分の一に短縮したわけである。

また敵はその封鎖戦術よりして、日本本土と南方との連絡線を送断せんと企て、比島奪還作戦を遂行したものであるが、比島奪還作戦によつて比島一帯の制空、従つてまた制海の實権を一應把握することによつて、敵はその目的を兎に角達成したのである。しかし米國務次官グループが「日本は米軍がたとひ臺灣以南を封鎖すると、石炭、アルミニウム、鐵、食糧等の重要物資を自給自足し得る」といふ通り、たとひ比島の喪失によつて南方資源の流入を阻止されることも、日本は滿洲、支那の大陸との連絡を確保する限りは何等の

致命傷を蒙らぬので、更に敵はこの日本と大陸、朝鮮、臺灣との連絡線を遮断し、日本本土を孤立無援の状態に完封せんとする企圖よりして、沖縄上陸作戦を強行したのである。

### 一億の生死を賭けし 本土決戦の火蓋切

かくて太平洋戦局は、わが本土の攻防を繰つて文字通り日本の生死を決定する最終決戦の歴史的段階にその巨歩を踏入れたのである。われわれはラバウルにおいて、マリナにおいて、そしてまた比島において、既に幾度か日米決戦の劇的戦局を迎へた。然しこれらの決戦において、われわれは遺憾ながら常に戦勢の支配権を敵に譲らねばならなかつたのである。然らばそれらの決戦において、折角敵撃滅の絶好の戦機を捕捉して置きながら、一體何故にわが軍は涙を流して後退せざるを得なかつたのか。それはいふまでもなく敵航空兵力の圧倒的優勢の前に、われは制空権を敵に奪はれたからに他ならぬ。そして近代戦においては、制空権のなきところに制海権のあり得ぬことも亦言ふまでもない。かくの如くわれわれは、航空兵力の劣勢の

ために制空権をわが手に獲得し得ず、つひに無意にも戦勝の神機を幾度か逸したのである。ところが、今までの決戦場は何れも太平洋上の占領地域であり、ラバウル決戦の次ぎにはマリナの決戦場があり、またマリナ決戦の次ぎには比島の決戦場があり、比島決戦の次ぎにはまだ本土の決戦場があつた。然し本土の次ぎの決戦場は絶対にないのである。そしてその本土決戦の火蓋が、ついに南西諸島において切られたのである。全くの背水の決戦である。

そして硫黄島戦局の一段落と共に、敵がだいたいの南西諸島方面に次ぎの上陸作戦を展開し来るであらうことは「日本本土に對する最後の攻撃を開始するために、硫黄島の一基地を入手したのみでは不十分にして、米軍は更に多くの基地を獲得せねばならぬ」といつたニミッツの言葉や、或ひはまた日本攻略のためには建てる大陸接岸作戦よりも、直接日本本土の心臓に真正面からメスを打ち込むべきである」と強調したマックアーサーの豪語などによつて大體豫想されたところである。

かくて敵が若し沖縄を完全支配することあれば、敵はマリナ、比島、硫黄島、沖縄の四つの基地を結ぶ對日基盤に據つて、わが本

土への爆撃、並びに封鎖の戦術を一段と大規模、且つ頻りに強化して来るであらうことはいふまでもない。然し爆撃と封鎖は如何に強化されようとも、そのみによつて戦争全體的勝利が決定されるものではない。現にヨーロッパ戦局が全世界に生きた教訓を示してゐる。従つて日本を完全に屈服せしむべき唯一の途が「東京への進軍」にあり、日本民族の抹殺にありとする敵の作戦企圖は、ルーズベルトの放言を俟つてもなく、夙に明白なところである。故に先の硫黄島上陸といひ、今回の沖縄上陸といひ、何れも日本抹殺作戦展開のための最後の足場を固めんとするものなることは言ふまでもない。

沖縄—九州間六百軒の距離をもつて、沖縄戦局の重大性を些かにても過小評價せんとする傾向があれば、それは飛んでもない、誤見である。即ち六百軒の空間は、航空機をもつてすれば僅かに二時間足らずの距離であり、現に二千数百軒を隔てたマリナ基地からの空爆が、如何にわれわれ一億國民を脅威しつゝあるかを體認すれば、航空基地の前進が、如何に決定的な重大役割を演ずるものなるかを判明するであらう。この故に敵の沖縄上陸の目的は、先づ第一に航空基地の敷設であり、第二にはその制空権の傘下において陸揚地を

前進せしめんとすることにあることは火蓋を切るよりも明らかである。そして敵は同方面の制空、制海権を強奪し、滿洲、支那、朝鮮、臺灣と、わが本土との連絡を封鎖し、更に硫黄島基地と呼應する爆撃によつて、わが本土の生産力と軍事施設を徹底的に破壊し、遂に、いよいよ日本本土上陸の最終作戦を断行せんと企圖してゐるのである。従つてわれわれは今こそ、南西諸島日本抹殺の足場を築かんとする敵を断じ、江津津に蹴落さなければならぬ。沖縄縣民數十万の同胞は老幼男女の別なく、今や家郷の山河を鮮血に染めてわが皇土の一角防衛に殉せんとし、陸、海、空軍は既に悉く特攻隊となり、艦船も、飛行機も、新兵器も、全部を傾盡して、この一戦を死守せんとしてゐる。そして太平洋の戦訓は、この一戦を死守し得るものが制空権の確保にあることをわれわれに明示してゐる。われわれ一億は今こそ人も、物も、凡べてを戦力増強に盡せしめ、最後の死力を發揮して國難打開に挺身せねばならぬ。一億國民の生死を賭けた本土決戦は既に火蓋を切つたのである。いま一億の雄力を出し切らずして、恨みを千載の青史に遺すこと勿れ。大日本帝國は皇統二千六百年、天皇と共に存し、一億軍民は悉く、陸下の強子たることを銘記せねばならぬ。